

安達正浩作 「秋一猫と本とバツハ」

安藤純 ハ、ハ、ハ。フッフ。  
藤本透 クッフ。ハツハ。  
純 ブオーン、ブオーン、ズボン！ プシュー、ブーンブーン。  
透 カッカッカ。  
純 いやあ、こりゃ傑作だ。これで猫かね、まったく。この目、ピキピキピキって感じでさあ。またこの2001年の月着陸船のような、ブラックボディーに、このしっぽ。  
透 ダメダメ、いじめたら。  
純 大丈夫、大丈夫。  
透 ダメだって。  
純 しかし、これが男の部屋かね。猫の縫いぐるみがゴロゴロ。太いのや胴長や、それにこれ、今はやりのシルビアっていったっけ。  
透 もらったんだよ。  
純 この白いのも、なかなかリアルじゃん。  
透 何やってんの？  
純 いや、体操させてんだよ。  
透 そんな体操があるかよ。  
純 ウツハツハ。  
透 ダメだって。話したっけ？  
純 何を？  
透 友達の猫のこと。  
純 いや。  
透 友達が、やっぱりそういう白い猫もらっただって。そいでね、毎日かわいがって、遊んでやったんだってさ。ある時、いつものように遊んでたんだけど、そう、ちょうど安藤がやってるように、こう、胴をつかんで上半身を前後にブンブン猫を振って遊んでたら、猫の背中が折れて死んじゃったんだって。  
純 ゲー、ひでえ。何それ。猫そんなにされたらたまらないよ。悲惨な猫だ。  
透 だけど、ムチャクチャなやつだよな、あいつも。それを平然とこう話すんだよね。「死んじゃった」って。  
純 その常識を超えた人間性が怖いな。かわいそうなのは猫であった。“白昼の悪夢”ってとこだな。  
透 だからダメだって、ブンブンしたら。  
純 いいじゃん。こんな風にしてたんだな。こりゃ異常だ。ブーンブーン。  
透 そんなことしてないで、早くシナリオ書いたら？  
純 グサーッ 悪魔。下がれサタン！  
透 何を言っておるか。もう9か月も期日を過ぎてんだろ。  
純 あーあ、それを言わないでおくれ。このナイーブな心が傷つくではないか。  
透 もう変態だな。どこがナイーブなんだよ。鏡見てみなよ。

純 人の心が鏡見て分かったら苦労せんわ。でも困った。なんと最終の期日は明日なのだ、友よ。

透 気持ち悪いな。すぎるな人に！ すがって花実が咲かせるか。

純 そう言わずに、なんとか助けてくれー。例えば参考になる本とか。

透 うーん、そうねえ。本か。

透の母 (階下から)透、コーヒーが入りましたよ。

透 ほーい！

純 あ、いつもすいません！

母 いいんですよ。透、取りに来て。

透 ヘイヘーイ。どっころしよと。取りに行くか。めんどくせえな。

効果音 (階段を下りていく足音)

ナレーション 分かりますか、この会話？ あまり教養のひらめきを感じさせる対話ではありませんが、この二人は大学生で、“悪友”をもって任ずる安藤純君と藤本透君。この番組「この指とまれ」のシナリオを書く番になった安藤君の舞台裏をこっそりのぞいているんです。そう、文才に恵まれなかった安藤君が、締め切りを前に、ディレクターの小川さんの渋い顔を思い浮かべながら、藤本君の家に押しかけて、必死にすがりついているところなんです。

あ、藤本君、戻ってきました。

効果音 (階段を上ってくる音)

純 あ、しばらく上がってこなかったけど、やけに時間がかかったね。何やってたの？

透 いや別に。トイレ。

純 しかし困った。

透 (茶菓を勧めて)どんぞ。

純 いやー、梅の香巻き。これ好きなんだよね。

透 どうしょっか。

純 うん。なんかいい本はないかね。

透 そうね。フフフフ、これどう？

純 何それ？

透 ビアスの「いのちの半ばに」読んだ？

純 読んだよ。そんな人ダメだよ。O・ヘンリーを上回るあの皮肉。とても使えないよ。これだけは使いえません。

透 しかしすごい人だよ。これほどの皮肉な作家もまれだよ。

純 そりゃいいから、ほかには？

透 あれはシュトルムの…。

純 ダメだって。あれは恋愛もんじゃん。自分の趣味じゃダメなの。

透 ふーん、困ったな。実にシュトルムはいいのに。短くて手ごろなのってあんまりないんだよな。

純 ふーん、困った。

透 息抜きに、レコードでも聴こう。

純 ほいよ。しかし困ったな。(ため息)

透 このレコードは実にいい。



ことなど、どうして知りましょう。」

(透の声)それからあと1箇所、バッハの死の時のことが書いてある所で――、

(女性の声)「私が朝早く、日の出と共に入っていきますと、クリストフ(バッハの義理の息子)が原稿を見せてくれて、その出来事を物語りました。「まあ、見てごらんなさい。なんて美しいんでしょう！」と彼は申しました。『今ぞ我、神のみ前に進む』、彼の魂の苦痛と闇との闘いです。実に美しい、安らかなメロディーですよ。その暗黒を貫いて、ほのぼのと黎明の薄明かりが差してきて、次第に天国のような、この世ならぬ明るさへと高まっていくのです。でも私はもう涙でその上が読めませんでした。まくらの上のセバスチャンの顔をしみじみと見つめながら、私は、これが最後の歌だったのだ、あのひん死の白鳥が、いまわの際に歌うように、と思いました。窓辺に行き窓かけを少し払うと、私は外を見やりました。今四も上りつつある太陽が、大空を美しく彩っております。私は、愛する夫の長い間あくがれていた平和な眠りを妨げないように、こみ上げてくる涙を抑えているのでした。」(間)

それじゃおしまい、バッハが最後に作曲した「今こそ我、神のみ前に進む」を聴いてみよう。

音楽

(レコード曲)

ナレーション

…とまあ、こんな具合なんですが、結局シナリオはどうなったんでしょうね。「なーんだ、このドラマ、何を言いたいのか？」なんて言わないでくださいね。芸術の秋たけなわ、あまり難しく考えないで、たまにはあなたにも、猫をひざに、文学を読みながら、美しい音楽を聴いてもらいたかったんです。そう、“この指とまれ”提供の「名曲アルバム」を。バッハは、生涯かけて貫いたキリストへの愛と信仰を、五線譜の上に書きつづりました。この番組をお聴きになったあなたの心も、今静かに、聖書と祈りに導かれますように――。

<完>